2022年度　地区別教授者研究会筆記試験の問題と解答

■関東・信越地区（東京前期）３月５日

〔1〕色彩盛花様式本位における、次の花材の扱いの要点について、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。但し、同じ語句を２回使用してもよい。

〇いちはつ

〔　イ　〕に花型構成する。葉は〔　ロ　〕を用いることを原則とする。葉の長短のつけ方は自由。〔　ハ　〕または三枚組を用い、〔　ニ　〕は必ず向き合わせる。副枝は〔　ホ　〕を使うことを原則とする。主枝の花は〔　ヘ　〕に用い葉より高くするが、それ以外の花は高さ・向きともに自由である。

〇アマリリス

〔　ト　〕に構成する。花１本に葉〔　チ　〕を三方から長短の差をつけずに挿し添わせる。主枝の花は〔　リ　〕よりも高く使い、副枝は葉でとるように構成する。副枝の花は、基準よりやや起こし気味に挿す。小さな水盤の場合は、花２本・葉〔　ヌ　〕で主・副を構成する。

・三枚組	・下垂型	・５枚	・直立型	・１３枚	・はかま
・観水型	・爪	・八枚組	・実	・縦	・自然組
・９枚	・二枚組	・横	・葉	・３枚	・水切り葉

〔2〕写景盛花様式本位の下記の主材による春の基本取合せを解答用紙に記入しなさい。

描写法	主 材	取　合　せ
近景	麦	麦
中景	芽出し紫陽花	芽出し紫陽花
中景	芽出し木苺	芽出し木苺
遠景	桜	桜

〔3〕いけばな史にあらわれる次の人物について、空欄には当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

〇世阿弥

〔　１　〕時代初期の〔　２　〕(能楽師)、謡曲作家。〔　３　〕の子。将軍足利〔　４　〕・義持に仕え、能楽を優美なものに洗練するとともに、これに芸術論の基礎を与えた。『　５　』『花鏡』『申楽談義』など23部の著がある。

〇古田織部

〔　６　〕時代の武将・茶人。〔　７　〕の高弟。織田信長、〔　８　〕に仕え、のちに徳川家に通じ〔　９　〕の茶の湯師範をつとめた。当時の茶道・いけばなに新境地を開き、武家茶道の確立につとめた。茶陶に〔１０〕の原点をつくった。

・観阿弥	・鎌倉	・千利休	・義満	・京焼	・織部好み
・義政	・豊臣秀吉	・室町	・公家	・能役者	・槐記
・安土桃山	・池坊専応	・相阿弥	・秀忠	・花伝書	・小堀遠州

◆解答

〔1〕［イ］　直立型　　［ロ］　自然組　　［ハ］　二枚組　［ニ］　爪　　［ホ］三枚組
　　［ヘ］　縦　　［ト］　直立型　　［チ］　３枚　　［リ］　葉　　［ヌ］　５枚

〔2〕

描写法	主 材	取　合　せ
近景	麦	麦　菜の花　日蔭
中景	芽出し紫陽花	芽出し紫陽花　紫蘭　日蔭
中景	芽出し木苺	芽出し木苺　燕子花　日蔭
遠景	桜	桜　菜の花　日蔭

〔3〕［1］室町　　［2］能役者　　［3］観阿弥　　［4］義満　　［5］花伝書
　　［6］安土桃山　　［7］千利休　　［8］豊臣秀吉　　［9］秀忠　　［10］織部好み

■関東・信越地区（東京前期）３月６日

〔1〕写景盛花様式本位の遠近描写法について、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

1．写景盛花様式本位のもつ特有の技法で、〔　イ　〕に表現する景観に　〔　ロ　〕を出すための技法。

2．遠景・　〔　ハ　〕・近景に大別される。遠景は遠望する　〔　ニ　〕の姿、中景は枝ぶりよく生い茂る木々の姿、近景は〔　ホ　〕の草花や、木では枝ぶりや花・〔　ヘ　〕の美しさを描写の主体とする。

3．遠景描写に〔　ト　〕・縮小挿法、中景描写に〔　チ　〕、近景描写に水ものの〔　リ　〕・株挿しなどの定められた挿法がある。

4．植物を高木・〔　ヌ　〕・草花に大別し、遠景・中景・近景の目的にあった取合せが定められている。

・眼前	・交差美	・瓶	・一株挿し	・水盤上	・輪状の株立ち
・葉組	・中景	・実	・遠近感	・葉	・多面性
・親株	・一木挿し	・低木	・海浜	・大樹	・省略の美

〔2〕写景盛花様式本位の下記の主材による春の基本取合せを解答用紙に記入しなさい。

描写法	主 材	取　合　せ
近景	鳴子百合	
中景	小松	
中景	木瓜	
遠景	梅	

〔3〕いけばな史にあらわれる次の人物について、空欄には当てはまる語句を下記より選択し、解答

用紙に文字で記入しなさい。ただし、同じ語句が２度入ることがあります。

○尾形光琳

〔　１　〕時代中期の〔　２　〕。〔　３　〕・俵屋宗達の図案的な画風を学び、〔　４　〕を完成させた。

陶磁器の絵付けや蒔絵、染織の分野でも、卓抜な意匠の作品を残している。〔　５　〕の兄。

代表作に《　６　》《　７　》《 八橋蒔絵硯箱 》などがある。

○近衛予楽院

〔　８　〕時代中期の公家。太政大臣。本名家熙。剃髪して予楽院と号す。書画・詩歌に優れ、立華の名手でもあった。彼の言葉や行動を、侍医 〔　９　〕が書き留めた『 １０ 』は、茶道・華道の貴重な資料となっている。

・尾形乾山	・明治	・山科道安	・御飾記	・江戸	・北野天神縁起絵巻
・槐記	・造園家	・本阿弥光悦	・紅白梅図屏風	・狩野永徳	・燕子花図屏風
・装飾的様式	・長谷川等伯	・侘茶	・古田織部	・画家	・古今立花大全

◆解答

〔1〕　[イ]　水盤上　　[ロ]　遠近感　　[ハ]　中景　　[ニ]　大樹　　[ホ] 眼前
　　[ヘ]　葉　　[ト]　一木挿し　　[チ]　一株挿し　　[リ]　葉組　　[ヌ]　低木

〔2〕

描写法	主 材	取　合　せ
近景	鳴子百合	鳴子百合　都忘れ　日蔭
中景	小松	小松　乙女百合　日蔭
中景	木瓜	木瓜　菜の花　日蔭
遠景	梅	梅　錦紅花つつじ　日蔭

〔3〕　※[6][7]は入れ替え可

[1] 江戸　　[2] 画家　　[3] 本阿弥光悦　[4] 装飾的様式　[5] 尾形乾山
[6] 燕子花図屏風　[7] 紅白梅図屏風　[8] 江戸　　[9] 山科道安　　[10] 槐記

■中国地区（岡山）４月１７日

〔1〕 色彩盛花様式本位における、谷渡りの扱いの要点について、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

〔　イ　〕に花型構成し、〔　ロ　〕枚の偶数挿しにする。花留を丸水盤の〔　ハ　〕に置き、〔　ニ　〕にする。葉に〔　ホ　〕の差をつけ、主枝は〔　ヘ　〕、副枝は主枝の〔　ト　〕、中間に使う４枚の葉は主枝の〔　チ　〕、小葉２枚は主枝の２分の１以下とする。主・副を規定の位置に挿し、中間４枚は二つ付の七宝の〔　リ　〕に挿して、〔　ヌ　〕の表現にし、その中心部に若い葉の表現として小葉２枚を向かい合わせに挿す。

・大小長短	・直立型	・３分の２	・８	・４	・標準寸法
・２分の１	・中心線上	・輪状の株立ち	・傾斜型	・１１	・２倍
・一株挿し	・大穴	・４分の３	・眼前の草花	・一木挿し	・縦穴

〔２〕下表の花材から連想する南画謎語画題および名数画題を選び、表中にふさわしい画題の番号を記入しなさい。

①富貴長年　②歳寒三友　③平安長春　④五瑞　⑤蒼松寿古　⑥子孫繁栄
⑦四君子　⑧歳寒雅友　⑨歳寒三清　⑩玉堂富貴　⑪三多　⑫三君

	画　題	花　　材		画　題	花　　材
1		菊　椿　松	6		梅　竹　蘭　菊
2		柘榴　仏手柑　桃	7		松　竹　梅
3		梅　竹　水仙	8		竹　ばら
4		葵　菖蒲　蓮　柘榴　枇杷	9		玉蘭　牡丹　海棠
5		松　南天	１０		牡丹　松

〔３〕いけばな史における次の人物について、空欄にあてはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。但し、同じ語句が２度入ることがある。

〇小堀遠州

〔　１　〕時代前期の茶人・造園家。茶道を　〔　２　〕　に学び新たに一流を創始した、〔　３　〕の茶道指南。遠江守で遠州と称する。〔　４　〕・和歌・いけばな・建築・陶磁・造園に巧みであった。　〔　５　〕や大徳寺孤篷庵は彼の作とされている。

〇藤掛似水

〔　６　〕時代中期、〔　７　〕を中心に活躍した　〔　８　〕の立華師。元禄時代、〔　９　〕　に池坊会頭・　〔　１０　〕とともに松一色の立華を立てたことで知られる。

・中国	・池坊	・絵画	・鎌倉	・猪飼三枝	・東大寺大仏開眼
・古田織部	・聚楽第	・江戸	・足利家	・長谷川等伯	・義政公御成式目
・桂離宮	・徳川家	・吉村華雲	・未生流	・大阪	・鷹ケ峰

◆解答

〔１〕[イ] 傾斜型　[ロ] ８　[ハ] 中心線上　[ニ] 一株挿し　[ホ] 大小長短
[ヘ] 標準寸法　[ト] ４分の３　[チ] ３分の２　[リ] 縦穴　[ヌ] 輪上の株立ち

〔２〕

	画　題	花　　材		画　題	花　　材
1	⑧	菊　椿　松	6	⑦	梅　竹　蘭　菊

2	⑪	柘榴　仏手柑　桃	7	②	松　竹　梅
3	⑨	梅　竹　水仙	8	③	竹　ばら
4	④	葵　菖蒲　蓮　柘榴　枇杷	9	⑩	玉蘭　牡丹　海棠
5	⑤	松　南天	１０	①	牡丹　松

〔3〕［1］江戸　［2］古田織部　［3］徳川家　［4］絵画　［5］桂離宮
［6］江戸　［7］大阪　［8］池坊　［9］東大寺大仏開眼　［10］猪飼三枝

■北海道地区（札幌）５月１５日

〔1〕写景盛花様式本位の基本取合せで、夏の遠景および中景描写の下記の主材の取合せと挿法について、空欄にあてはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。但し、同一用語が重複することがあります。

基本取合せ	描写法	花型	挿法の要点
蓮一種	遠景	〔　イ　〕	一種挿しとする。葉〔 ロ 〕枚・花２本・巻き葉〔 ハ 〕本を遠景描写での〔 ニ 〕限度とする。花と〔 ホ 〕は同じ位置に挿し、花は立ち葉より高く、巻き葉は立ち葉より〔 ヘ 〕扱う。
ななかまど 姫百合 日蔭 または 山しだ	中景	〔　ト　〕 または 〔　チ　〕	ななかまどは他の〔 リ 〕にする花材ほど根元を締めない。 姫百合は縮小挿法はとらないが、中景として小ぶりに扱う。 日蔭のほかに〔 ヌ 〕として山しだを下草として使う場合もある。

・下垂型	・２	・一株挿し	・最小	・海浜の表現	・直立型
・最大	・水切り葉	・高く	・１１	・傾斜型	・山間の表現
・５	・観水型	・巻き葉	・一木挿し	・低く	・眼前の草花

〔2〕夏の花材を使って文人調いけばなの取合せ（３種）を、解答用紙に記入しなさい。但し、同一花材が重複しないこと。

	型式	花　　材（３種）
1	瓶花	
2	瓶花	
3	瓶花	
4	盛花	

〔3〕いけばな史に現れる次の事項について、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

○ 仙伝抄

〔　1　〕時代末期の〔　2　〕の伝書。冨阿弥から７人を経て、〔　3　〕(専応) が天文５(1536)年に相伝したと記されている。内容は、本文・谷川流・奥輝之別紙の三つの部分から成る。本文は池坊系のいけばな、谷川流は〔　4　〕の系統のいけばな、奥輝之別紙は〔　5　〕の異本であろうとされている。

○尾形光琳

〔　6　〕時代中期の画家。本阿弥光悦・〔　7　〕の図案的な画風を学び、〔　8　〕を完成させた。陶磁器の絵つけや蒔絵・染織にも卓抜な意匠で名高い。〔　9　〕の兄。代表作に《　１０　》などがある。

・俵屋宗達	・明治	・公家	・尾形乾山	・江戸	・燕子花図屏風
・室町	・池坊専定	・桂離宮	・装飾的様式	・盛花	・古今立花大全
・古田織部	・立て花	・鎌倉	・池坊専慈	・武家	・義政公御成式目

◆解答

〔1〕※[ト][チ]は入れ替え可

[イ] 直立型　[ロ] 5　[ハ] 2　[ニ] 最小　[ホ] 巻き葉
[ヘ] 低く　[ト] 傾斜型　[チ] 直立型　[リ] 一株挿し　[ヌ] 山間の表現

〔2〕※この取合せの解答は一例です

	主材	取　合　せ
1	瓶花	糸芭蕉　松　ばら
2	瓶花	枇杷　笹百合　鉄線
3	瓶花	柘榴　蓮　夏菊
4	盛花	たちあおい　萱草　紫陽花

〔3〕[1] 室町　[2] 立て花　[3] 池坊専慈　[4] 公家　[5] 義政公御成式目
[6] 江戸　[7] 俵屋宗達　[8] 装飾的様式　[9] 尾形乾山　[10] 燕子花図屏風

■四国地区（高松）５月２９日

〔1〕色彩盛花様式本位における玉しだと花菖蒲の扱いの要点について、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。同じ語句を２回使用してもよい。

◎　玉しだ

〔　イ　〕に花型を構成し、〔　ロ　〕枚から〔　ハ　〕枚の奇数の葉を使う。花留を丸水盤の中心線上に置き、葉は同じ長さで〔　ニ　〕にする。扇を広げたような形に挿し、葉と葉が接触しないように適当な間隔をもって広がるようにする。

◎　花菖蒲

〔　ホ　〕に花型を構成する。花は〔　ヘ　〕本以上を用い、葉は〔　ト　〕とするが、〔　チ　〕に挿す葉は三枚組を用いる。花の〔　リ　〕・向きに定めはない。花菖蒲は主枝・

中間枝にのみ用い、〔　ヌ　〕には配材を用いる。

・一株挿し	・7	・一番前	・9	・観水型	・１３
・傾斜型	・自然組	・副枝	・直立型	・５	・客枝
・一番奥	・3	・高さ	・１５	・一木挿し	・下垂型

〔2〕燕子花を主材として、下記にしたがって取合せを解答用紙に記入しなさい。
但し、取合せは燕子花を含めて３種とし、燕子花以外の花材の重複はしないこと。

		取　合　せ（燕子花を含めて３種）
1	写景盛花様式本位	燕子花　・
2	写景盛花様式本位	燕子花　・
3	写景盛花自然本位	燕子花　・
4	写景盛花自然本位	燕子花　・
5	写景盛花自然本位	燕子花　・

〔3〕いけばな史にあらわれる次の事項について、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

〇近衛予楽院

〔　1　〕時代中期の〔　2　〕。太政大臣。本名家熙。剃髪して予楽院と号す。書画・〔　3　〕に優れ、立華の名手でもあった。彼の言葉や行動を、侍医〔　4　〕が書き留めた「　5　」は、茶道・華道の貴重な資料となっている。

〇古田織部

安土桃山時代の〔　6　〕・茶人。〔　7　〕の高弟。織田信長、〔　8　〕に仕え、のちに徳川家に通じ〔　9　〕の茶の湯師範をつとめた。当時の茶道・いけばなに新境地を開き、武家茶道の確立につとめた。茶陶に「　１０　」の原点をつくった。

・豊臣秀吉	・造園	・池坊専応	・詩歌	・武将	・君台観左右帳記
・瀬戸焼	・江戸	・秀忠	・明治	・山科道安	・織部好み
・公家	・袁宏道	・槐記	・千利休	・綱吉	・本阿弥光悦

◆解答

〔1〕[イ] 直立型　[ロ] 9　[ハ] １３　[ニ] 一株挿し　[ホ] 直立型
[ヘ] 3　[ト] 自然組　[チ] 一番前　[リ] 高さ　[ヌ] 副枝

〔2〕※この取合せの解答は一例です

		取　合　せ（燕子花を含めて３種）
1	写景盛花様式本位	燕子花　芽出し木苺　日蔭
2	写景盛花様式本位	燕子花　河骨　睡蓮

3	写景盛花自然本位	燕子花　暖竹　雪柳
4	写景盛花自然本位	燕子花　葦　おもだか
5	写景盛花自然本位	燕子花　野ばら　睡蓮

〔3〕[1] 江戸　[2] 公家　[3] 詩歌　[4] 山科道安　[5] 槐記
[6] 武将　[7] 千利休　[8] 豊臣秀吉　[9] 秀忠　[10] 織部好み

■東北地区（青森）６月５日

〔1〕色彩盛花様式本位における、菊の三種挿しの挿法の要点について、空欄にあてはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

一輪咲きの 〔 イ 〕3種類（黄〔 ロ 〕本・赤3本・〔 ハ 〕3本）を用いることが基準。直立型に花型構成し、主枝・〔 ニ 〕・中間枝に 〔 ホ 〕 色、客枝・中間枝に白、中間を〔 ヘ 〕系統の花色とする。
直立型の花型の基本を守って挿すが、主枝・副枝の〔 ト 〕の奥行きより、副枝から〔 チ 〕への 〔 リ 〕 の広がりのほうが 〔 ヌ 〕なるように構成しなければならない。

・前後	・白	・小菊	・5	・下草	・客枝
・緑	・上下	・副枝	・黄	・長く	・近景
・中菊	・7	・短く	・左右	・主枝	・赤

〔2〕色彩盛花様式本位で、下記を主材とした取合せを解答用紙に記入しなさい。
ただし、取合せは主材を含めて３種で、花材の重複はしないこと。

	主材	取　合　せ
1	アマリリス	アマリリス・
2	花菖蒲	花菖蒲　・
3	いちはつ	いちはつ　・
4	アガパンサス	アガパンサス・
5	玉しだ	玉しだ　・

〔3〕いけばな史にあらわれる次の事項について、空欄には当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

〇千利休

安土桃山時代の〔 1 〕。〔 2 〕の祖。〔 3 〕に茶道を学び、〔 4 〕を完成させた。初め〔 5 〕に仕え、後に豊臣秀吉に仕えて寵遇が厚かったが、秀吉の怒りを受けて死を賜わった。

〇仙伝抄

〔 6 〕時代末期の〔 7 〕の伝書。冨阿弥から７人を経て、〔 8 〕（専応の誤りとされる）が天文５(1536)年に相伝したと記されている。内容は、本文・谷川流・奥輝之別紙の三

つの部分から成る。本文は池坊系のいけばな、谷川流は 〔　９　〕の系統のいけばな、奥輝之別紙は〔　１０　〕の異本であろうとされている。

・立て花	・織田信長	・同朋衆	・武家	・千家流	・義政公御成式目
・侘茶	・池坊専慈	・茶人	・徳川家康	・明治	・武野紹鷗
・琳派	・古田織部	・室町	・池坊専定	・公家	・古今立花大全

◆解答

〔1〕 ［イ］中菊　［ロ］5　［ハ］白　［ニ］副枝　［ホ］黄
［ヘ］赤　［ト］前後　［チ］客枝　［リ］左右　［ヌ］長く

〔2〕※この取合せの解答は一例です

	主材	取　合　せ
1	アマリリス	アマリリス　スイートピー　マーガレット
2	花菖蒲	花菖蒲　紫陽花　姫百合
3	いちはつ	いちはつ　木苺　都忘れ
4	アガパンサス	アガパンサス　ばら　カラジウム
5	玉しだ	玉しだ　カーネーション　小菊

〔3〕［1］茶人　［2］千家流　［3］武野紹鷗　［4］侘茶　［5］織田信長
［6］室町　［7］立て花　［8］池坊専慈　［9］公家　［10］義政公御成式目

■近畿中部地区（大阪）７月９日

〔1〕写景盛花様式本位の下記の挿法について、空欄に該当する語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

◎　一木挿し

梅・〔　1　〕など、遠景で〔　2　〕を表現する際の技法。〔　3　〕に花型を構成する。まず主枝の〔　4　〕ほどの長さの木（ぼく）を挿し、その木を中心に主枝・副枝・〔　5　〕を根元をきつく寄せて挿す。
副枝は主枝と〔　6　〕にして主枝との間隔を広くとる。

◎　一株挿し

〔　7　〕・芽出し紫陽花など、中景描写で 〔　8　〕になった木々の姿を表現する際の技法。直立型または〔　9　〕に花型を構成する。主枝・〔　１０　〕・中間の根元を寄せて挿す技法であるが、一木挿しよりは挿し口をゆるやかにする。

・中間	・南天	・下垂型	・副枝	・傾斜型	・海浜の表現
・直立型	・木瓜	・１本の大樹	・２倍	・桜	・低木状の茂み
・同寸	・客枝	・観水型	・枇杷	・半分	・眼前の草花

〔2〕写景盛花様式本位の夏の季節で、下記の主材・描写法での基本取合せを解答用紙に記入しなさい。
（但し、一種挿しは避けること）

季節	描写法	主材	取合せ
夏	遠景	小松	小松・
夏	中景	ななかまど	ななかまど・
夏	近景	しゃが	しゃが・
夏	近景	燕子花	燕子花・
夏	近景	蓮	蓮・

〔3〕流祖小原雲心先生の業績について、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

1．〔 A 〕中期に、〔 B 〕を創案し、〔 C 〕の基礎を築いた。
2．盛花に、〔 D 〕を取り入れて色彩的な表現をする 〔 E 〕と、自然の景観を描写する〔 F 〕という二つの表現目的を定めた。
3．〔 G 〕 を体系化し、〔 H 〕という名で指導上に定着させた。
4．〔 I 〕 を〔 J 〕 で行い、いけばなを一般に普及させるのに大きな功績があった。

・色彩盛花	・江戸	・文人調いけばな	・寺	・明治	・近代いけばな
・瓶花	・盛花	・花会	・投げ入れ花	・前衛いけばな	・花意匠
・デパート	・洋花	・茶花	・下草	・自然盛花	・琳派調いけばな

◆解答

〔1〕[イ] 桜　[ロ] 1本の大樹　[ハ] 直立型　[ニ] 半分　[ホ] 中間
[ヘ] 同寸　[ト] 木瓜　[チ] 低木状の茂み　[リ] 傾斜型　[ヌ] 副枝

〔2〕

季節	描写法	主材	取合せ
夏	遠景	小松	小松・なでしこ・日蔭
夏	中景	ななかまど	ななかまど・姫百合・日蔭または山しだ
夏	近景	しゃが	しゃが・あざみ・日蔭
夏	近景	燕子花	燕子花・河骨・睡蓮
夏	近景	蓮	蓮・河骨

〔3〕[A] 明治　[B] 盛花　[C] 近代いけばな　[D] 洋花　[E] 色彩盛花
[F] 自然盛花　[G] 投げ入れ花　[H] 瓶花　[I] 花会　[J] デパート

■近畿中部地区（大阪）７月１０日

〔1〕水ものについて、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

1．〔　イ　〕に含められる。水生・〔　ロ　〕植物を用い、水面・水辺の〔　ハ　〕を描写する。
2．写景盛花〔　ニ　〕にあっては、葉組・株挿し・花留めの位置と挿し位置・〔　ホ　〕など厳密に定められ、約束にしたがっていける。〔　ヘ　〕として用いる場合、蓮の〔　ト　〕は遠景。他はすべて〔　チ　〕とする。
3．栽培された水生植物同士、〔　リ　〕と栽培種、水生ではない花材と〔　ヌ　〕の３通りの取合せが行われる。

・一種挿し	・主材	・色彩本位	・風致景観	・野生種	・中景描写
・色彩盛花	・取合せ	・水辺	・瓶	・海浜の表現	・写景盛花
・水生植物	・花意匠	・近景描写	・一木挿し	・様式本位	・客枝

〔2〕下表の花材から連想する南画謎語画題および名数画題を選び、表中にふさわしい画題の番号を記入しなさい。

①富貴長年　②歳寒三友　③平安長春　④五瑞　⑤蒼松寿古　⑥子孫繁栄
⑦四君子　⑧歳寒雅友　⑨歳寒三清　⑩玉堂富貴　⑪三多　⑫三君

	画　題	花　　材		画　題	花　　材
1		菊　椿　松	6		梅　竹　蘭　菊
2		柘榴　仏手柑　桃	7		松　竹　梅
3		梅　竹　水仙	8		竹　ばら
4		葵　菖蒲　蓮　柘榴　枇杷	9		玉蘭　牡丹　海棠
5		松　南天	10		牡丹　松

〔3〕いけばな史における次の人物について、空欄にあてはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。但し、同じ語句が２度入ることがある。

〇藤掛似水

〔　1　〕時代中期、〔　2　〕を中心に活躍した〔　3　〕の立華師。元禄時代、〔　4　〕に池坊会頭・〔　5　〕とともに松一色の立華を立てたことで知られる。

〇古今立花大全

江戸時代前期、池坊の立華と〔　6　〕を初めて系統的に理論づけた指導書。著者は〔　7　〕。花形、道具（役枝）の使い方、花材の紹介、用語の解説、下準備など立華に関するすべての解説がなされている。

〇槐記

〔　8　〕時代中期、近衛予楽院（家熙）の〔　9　〕であった〔　１０　〕が、享保９(1724)年から 11 年間にわたり予楽院の言動を書き留めた記録。予楽院は学問芸術ともに博学多才で、立華の名手でもあった。座敷飾りや茶の湯会記などが多く記録され、いけばなの資料としても

第一級のものである。

・砂之物	・鎌倉	・大阪	・未生流	・同朋衆	・長谷川等伯
・侍医	・聚楽第	・池坊	・江戸	・山科道安	・十一屋太右衛門
・能阿弥	・水もの	・猪飼三枝	・本阿弥光悦	・池坊専応	・東大寺大仏開眼

◆解答

〔1〕[イ] 写景盛花　[ロ] 水辺　[ハ] 風致景観　[ニ] 様式本位　[ホ] 取合せ
[ヘ] 主材　[ト] 一種挿し　[チ] 近景描写　[リ] 野生種　[ヌ] 水生植物

〔2〕

	画　題	花　　材		画　題	花　　材
1	⑧	菊　椿　松	6	⑦	梅　竹　蘭　菊
2	⑪	柘榴　仏手柑　桃	7	②	松　竹　梅
3	⑨	梅　竹　水仙	8	③	竹　ばら
4	④	葵　菖蒲　蓮　柘榴　枇杷	9	⑩	玉蘭　牡丹　海棠
5	⑤	松　南天	10	①	牡丹　松

〔3〕[1] 江戸　[2] 大阪　[3] 池坊　[4] 東大寺大仏開眼　[5] 猪飼三枝
[6] 砂之物　[7] 十一屋太右衛門　[8] 江戸　[9] 侍医　[10] 山科道安

■九州地区（福岡）８月２７日

〔1〕色彩盛花様式本位における、谷渡りの扱いの要点について、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

〔　1　〕に花型構成し、〔　2　〕 枚の偶数挿しにする。花留めを丸水盤の〔　3　〕に置き、〔　4　〕にする。
葉に 〔　5　〕 の差をつけ、主枝は 〔　6　〕 、副枝は主枝の 〔　7　〕 、中間に使う４枚の葉は主枝の 〔　8　〕 、小葉２枚は主枝の 〔　9　〕 以下とする。主・副を規定の位置に挿し、中間４枚は二つ付の七宝の 〔　１０　〕 に挿して、輪状の株立ちにし、その中心部に若い葉の表現として小葉２枚を向かい合わせに挿す。

・大小長短	・直立型	・３分の２	・８	・４	・標準寸法
・２分の１	・中心線上	・３倍	・傾斜型	・１１	・２倍
・一株挿し	・大穴	・４分の３	・眼前の草花	・一木挿し	・縦穴

〔2〕写景盛花様式本位における、下記の主材の基本取合せを解答用紙に記入しなさい。

	主材	季節	描写法	取合せ
1	小松	夏	遠景	小松　・
2	夏はぜ	夏	中景	夏はぜ・
3	ななかまど	夏	中景	ななかまど・
4	しゃが	夏	近景	しゃが・
5	蓮	夏	近景	蓮　・

〔3〕いけばな史にあらわれる次の事項について、空欄には当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

〇千利休

安土桃山時代の〔　1　〕。〔　2　〕の祖。〔　3　〕に茶道を学び、〔　4　〕を完成させた。初め〔　5　〕に仕え、後に豊臣秀吉に仕えて寵遇が厚かったが、秀吉の怒りを受けて死を賜わった。

〇仙伝抄

〔　6　〕時代末期の〔　7　〕の伝書。冨阿弥から７人を経て、〔　8　〕(専応の誤りとされる）が天文５(1536)年に相伝したと記されている。内容は、本文・谷川流・奥輝之別紙の三つの部分から成る。本文は池坊系のいけばな、谷川流は 〔　9　〕の系統のいけばな、奥輝之別紙は〔　１０　〕の異本であろうとされている。

・立て花	・武野紹鷗	・鎌倉	・公家	・千家	・君台観左右帳記
・徳川家康	・武家	・池坊専慈	・文人花	・安土桃山	・義政公御成式目
・未生	・侘茶	・小堀遠州	・池坊	・池坊専定	・織田信長

◆解答

〔1〕[イ]　傾斜型　　[ロ] 8　　[ハ] 中心線上　[ニ] 一株挿し　　[ホ] 大小長短
[ヘ] 標準寸法　　[ト] ４分の３　[チ] ３分の２　[リ] ２分の１　　[ヌ] 縦穴

〔2〕

	主材	季節	描写法	取合せ
1	小松	夏	遠景	小松　・　なでしこ　・　日蔭
2	夏はぜ	夏	中景	夏はぜ・　あざみ　・　日蔭または山しだ
3	ななかまど	夏	中景	ななかまど・　姫百合　・　日蔭または山しだ
4	しゃが	夏	近景	しゃが・　あざみ　・　日蔭
5	蓮	夏	近景	蓮　・　河骨

〔3〕[1] 安土桃山　[2] 千家　[3] 武野紹鷗　[4] 侘茶　[5] 織田信長
[6] 立て花　[7] 池坊専慈　[8] 池坊　[9] 公家　[10] 義政公御成式目

■九州地区（福岡）８月２８日

〔1〕写景盛花様式本位の基本取合せで、「四季」の中景・近景の取合せと挿法の要点について、空欄にあてはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

ドラセナ　描写法：中景　取合せ：ドラセナ・コンシンナ　ベゴニア　日蔭　　花型：直立型

〔　イ　〕・副枝・〔　ロ　〕にドラセナ・コンシンナを〔　ハ　〕本用いる。副枝の傾斜角度は基準より起こし気味に、〔　ニ　〕くらいにとどめる。〔　ホ　〕を表現する写景盛花と考える。ベゴニアは、中景にふさわしい小型で葉の締まったものを選び、中間・〔　ヘ　〕に挿す。

サンセベリア　描写法：近景　取合せ：サンセベリア　プリムラ　日蔭　　花型：〔　ト　〕

葉〔　チ　〕枚を〔　リ　〕にする。葉のうねりを生かして、主枝・〔　ヌ　〕・中間に挿し、株の眺めを上手に出すようにする。近景描写のため、あまり葉丈を短くする必要はない。

・中間枝	・８	・３０度	・観水型	・副枝	・眼前の草花
・直立型	・主枝	・１１	・客枝	・５	・南国情趣
・９０度	・株挿し	・傾斜型	・３	・下垂型	・一木挿し

〔2〕太藺を使った写景盛花様式本位の基本取合せを４種あげなさい（取合せには、「太藺」も記入すること）。

	季　節	取　合　せ
1	夏	
2	夏	
3	夏	
4	秋	

〔3〕下記の人物について、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

〇袁宏道

中国〔　１　〕時代末期の詩文家・〔　２　〕。袁中郎とも呼ばれる。広範な趣味をもち、中国文人の瓶花趣味を伝える専門の書『　３　』を著した。本書は瓶花の心得と鑑賞について記し、中国のいけばな書として日本人に最も親しまれた。

〇藤掛似水

〔　４　〕時代中期、大坂を中心に活躍した、池坊の〔　５　〕。元禄時代、〔　６　〕に池坊会頭・〔　７　〕とともに松一色の立華を立てたことで知られる。

〇近衛予楽院

江戸時代中期の公家。〔　８　〕。本名家熙（いえひろ）。剃髪して予楽院と号す。書画・詩歌に優れ、立華の名手でもあった。彼の言葉や行動を、侍医〔　９　〕が書き留めた『１０』は、茶道・華道の貴重な資料となっている。

・太政大臣	・瓶史	・琳派画家	・明	・聚楽第	・東大寺大仏開眼
・鎌倉	・立華師	・武士	・文人	・池坊専好	・古今立花大全
・山科道安	・江戸	・猪飼三枝	・池坊専好	・槐記	・御飾記

◆解答

〔1〕 ［イ］ 主枝　［ロ］ 中間枝　［ハ］ 3　［ニ］30 度　［ホ］ 南国情緒
［ヘ］ 客枝　［ト］ 直立型　［チ］ 5　［リ］ 株挿し　［ヌ］ 副枝

〔2〕

	季　節	取　合　せ	
1	夏	河骨　・　太藺	順不同
2	夏	海芋　・　太藺	
3	夏	雪柳　・　太藺　・　睡蓮	
4	秋	燕子花　・太藺　・　河骨	

〔3〕 ［1］明　［2］文人　［3］瓶史　［4］江戸　［5］立華師
［6］東大寺大仏開眼　［7］猪飼三枝　［8］太政大臣　［9］山科道安　［10］槐記

■関東・信越地区（東京後期）１１月５日

〔1〕写景盛花様式本位における、燕子花の下記の季節における挿法の特徴について、空欄にあてはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

〇秋

〔　イ　〕、折れ葉、〔　ロ　〕を葉組に混ぜる。〔　ハ　〕を葉組の上に高く、花は葉組の間に〔　ニ　〕挿す。夏より〔　ホ　〕は少なく、組葉を多く用いる。

〇晩秋

垂れ葉、折れ葉、虫食い葉に〔　ヘ　〕も混ぜ、葉組にとらわれず〔　ト　〕を加える。株数を厳しく省略し、〔　チ　〕で構成する。組葉を数多く挿す。〔　リ　〕の置き方は基本通りではなく、変化を見せるため斜めに置くこともある。実・〔　ヌ　〕の用い方は自由である。

・自然組	・巻き葉	・低く	・垂れ葉	・７株	・水切り葉
・花留め	・流し葉	・実	・花器	・虫食い葉	・株数
・２株	・一木挿し	・枯れ葉	・高く	・花	・はかま

〔2〕秋の花材を使った琳派調いけばなの取合せを解答用紙に記入しなさい（花材の重複はしないこと）

	条　件	取　合　せ　花　材
1	三種挿し	
2	三種挿し	
3	五種挿し	
4	五種挿し	

〔3〕いけばな史にあらわれる次の事項について、空欄には当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

〇二代池坊専好

〔　1　〕時代前期、立華形式を完成させた立華の名手。〔　2　〕の庇護を得て、立華を発展させ、芸術作品として成立させた。その作品は『立花之次第九十三瓶有』に写されている。

〇袁宏道

中国〔　3　〕時代末期の詩文家・〔　4　〕。袁中郎とも呼ばれる。広範な趣味を持ち、中国文人の瓶花趣味を伝える専門の書『　5　』を著した。本書は瓶花の心得と鑑賞について記し、中国のいけばな書として日本人に最も親しまれた。

〇仙伝抄

〔　6　〕時代末期の〔　7　〕の伝書。冨阿弥から７人を経て、〔　8　〕（専応の誤りとされる）が天文５（1536）年に相伝したと記されている。内容は、本文・谷川流・奥輝之別紙の三つから成る。本文は池坊系のいけばな、谷川流は・〔　9　〕の系統のいけばな、奥輝之別紙は〔１０〕の異本であろうとされている。

・瓶史	・明治	・立て花	・明	・武家	・後水尾天皇
・平安	・秦	・公家	・室町	・盛花	・義政公御成式目
・文人	・池坊専定	・江戸	・後鳥羽天皇	・槐記	・池坊専慈

◆解答

〔1〕　[イ]　垂れ葉　　[ロ] 虫食い葉　　[ハ] 実　　[ニ] 低く　　[ホ] 株数
　　[ヘ]　枯れ葉　　[ト] 自然組　　[チ] ２株　　[リ] 花留め　　[ヌ] 花

〔2〕解答例は一例です

	条件	取　合　せ
1	三種挿し	柿　中菊　薄（尾花）
2	三種挿し	萩　秋海棠　ほととぎす
3	五種挿し	葉鶏頭　楓　女郎花　竜胆　孔雀草
4	五種挿し	ひおうぎ　秋明菊　小松　紫式部　友禅菊

〔3〕[1] 江戸　　[2]　後水尾天皇　　[3] 明　　[4] 文人　　[5] 瓶史
　　[6] 室町　　[7] 立て花　　[8] 池坊専慈　[9] 公家　　[10] 義政公御成式目

■関東・信越地区（東京後期）１１月６日

〔1〕色彩盛花様式本位における、菊の三種挿しの扱いの要点について、空欄にあてはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

一輪咲きの〔 イ 〕３種類（ 黄 〔 ロ 〕本・ 赤３本・〔 ハ 〕３本 ）を用いることが基準。直立型に花型構成し、主枝・〔 ニ 〕・中間枝に 〔 ホ 〕色、客枝・中間枝に白、中間を〔 ヘ 〕系統の花色とする。
直立型の花型の基本を守って挿すが、主枝・副枝の〔 ト 〕の奥行より、副枝から〔 チ 〕への〔 リ 〕の広がりのほうが 〔 ヌ 〕なるように構成しなければならない。

・前後	・白	・小菊	・５	・下草	・客枝
・緑	・上下	・副枝	・黄	・長く	・近景
・中菊	・７	・短く	・左右	・主枝	・赤

〔２〕Ａ群の南画謎語画題および名数謎語画題に定められている花材をＢ項と照合し、解答用紙に適正な画題を数字で記入しなさい。

Ａ群

①富貴長年　②歳寒三友　③平安長春　④五瑞　⑤蒼松寿古　⑥子孫繁栄
⑦四君子　⑧歳寒雅友　⑨歳寒三清　⑩玉堂富貴　⑪三多　⑫三君

Ｂ項

	画　題	花　　材		画　題	花　　材
1		菊　椿　松	6		梅　竹　蘭　菊
2		柘榴　仏手柑　桃	7		松　竹　梅
3		梅　竹　水仙	8		竹　ばら
4		葵　菖蒲　蓮　柘榴　枇杷	9		玉蘭　牡丹　海棠
5		松　南天	10		牡丹　松

〔３〕いけばな史にあらわれる次の事項について、空欄に当てはまる語句を下記より選択し、解答用紙に文字で記入しなさい。

○本阿弥光悦

〔　１　〕時代から江戸初期に活躍した工芸家・画家・書家。〔　２　〕の鑑定などを行う家に生まれる。書に優れ、漆芸、〔　３　〕にも秀でた。京都・〔　４　〕に芸術村を作り、総合的芸術活動を行った。代表作に《舟橋蒔絵硯箱》などがある。

○池坊専応

〔　５　〕時代後期の華道家。〔　６　〕の名手として知られ、宮中へも伺候して名声を博した。『　７　』は、いけばな理論書として後世まで影響を与えた。

○酒井抱一

〔　８　〕時代後期の画家、俳人。姫路城藩主・〔　９　〕の弟。尾形光琳ら京都の琳派の画風を再興し、後に江戸琳派と呼ばれる繊細で洗練された表現を確立した。代表作に《　１０　》などがある。

・大覚寺	・江戸	・唐物	・立花	・陶芸	・夏秋草図屏風
・安土桃山	・造園	・鷹ヶ峰	・専応口伝	・鎌倉	・洛中洛外図屏風
・刀剣	・平安	・盛花	・室町	・酒井忠以	・古今立花大全

◆解答

〔１〕　[イ]　中菊　[ロ]　５　[ハ]　白　[ニ]副枝　[ホ]　黄
[ヘ]　赤　[ト]　前後　[チ]　客枝　[リ]　左右　[ヌ]　長く

〔2〕

	画　題	花　　材		画　題	花　　材
1	⑧	菊　椿　松	6	⑦	梅　竹　蘭　菊
2	⑪	柘榴　仏手柑　桃	7	②	松　竹　梅
3	⑨	梅　竹　水仙	8	③	竹　ばら
4	④	葵　菖蒲　蓮　柘榴　枇杷	9	⑩	玉蘭　牡丹　海棠
5	⑤	松　南天	10	①	牡丹　松

〔3〕　［1］安土桃山　［2］　刀剣　［3］陶芸　［4］　鷹ヶ峰　［5］室町
［6］立花　［7］専応口伝　［8］江戸　［9］酒井忠以　［10］夏秋草図屏風